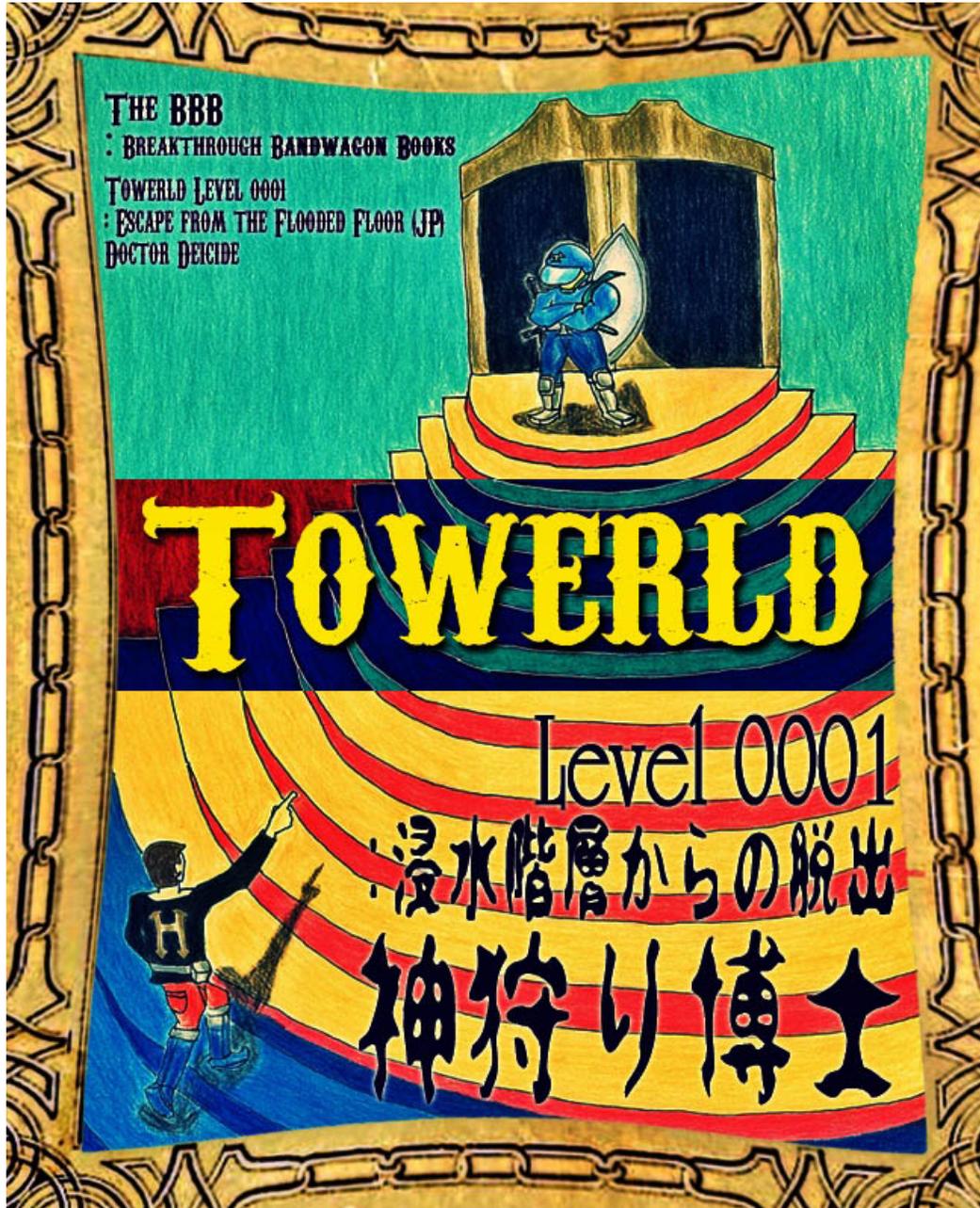


Towerld Level 0001: Escape from the Flooded Floor (JP)



(邦題『Towerld Level 0001: 浸水階層からの脱出』)

Written in both English and Japanese by Doctor Deicide

Cover illustration by Polka D

Cover design by Tanya

Copyright © 2013 Doctor Deicide / The BBB: Breakthrough Bandwagon Books

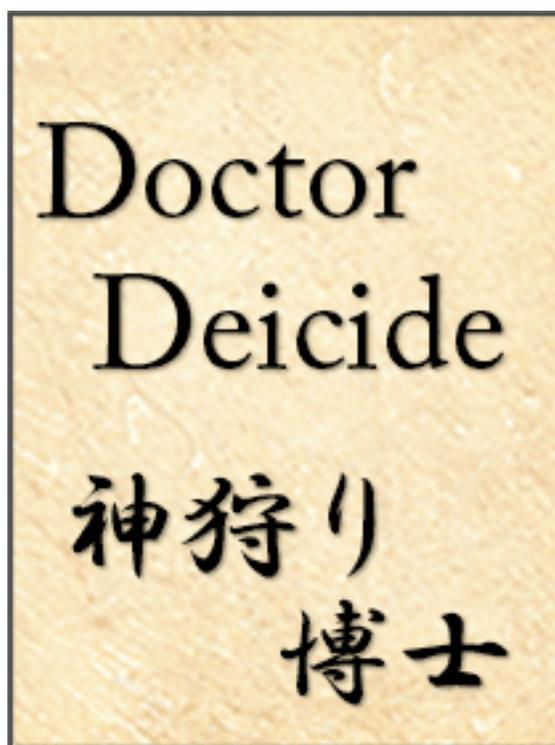
All rights reserved.

ISBN978-1-312-10557-7



The BBB ウェブサイト（日本語版）

<http://thebbb.net/jp/>



神狩り博士著者ページ

<http://thebbb.net/jp/cast/doctor-deicide.html>

Part One

---01---

「こんな生活、いつまで続くのだ？」

同じ事の繰り返しの人生ってのも、詰まらん。その上、自宅の自室で生活のために漁業を営むとなれば、尚更だ。ついこの間まで、俺のベッドは乾いていたのだが、今ではそのベッドが水面の下だ。俺の部屋も膝まで水位が上がり、魚共が俺の部屋にやって来て安眠を妨害するようになった。

本来ならば、寝室が浸水する事態になれば、排水しようとするだろう。だが、もう誰も気にしなくなっている。俺は必死に仲間やこの階区の住人達に事態（こと）の重大さを伝えようとはしたのだが、もう諦めている。これが昔習った馬耳東風って奴か？

俺の居住部屋（自宅）のみならず、この階層全体も、俺が幼少の頃には乾いていたんだよな。それも過去の話だ。

---02---

俺と俺の仲間達は、誰にも把握できない程に巨大な建造物の階層のうちの一つにて居住している。俺達は、親を知らない孤児のようなもの。この階層は階区に分けられていて、それぞれの階区がひとつの孤児院として機能するらしい。（俺達は家族やら親子やら兄弟姉妹の概念を経験した事が無いので、この社会構造を何の違和感をも抱かずに受け入れているが。）

俺達にはそもそも「生物学上の親」ってものが存在しない。本来は両親から子供が産まれるものだと言ったのだが、この建造物の住人に関してはそのルールは適用されないらしい。配児室にて設置されている配達装置に依り赤子が配達され、それがそれぞれの階区に割り当てられてから、年配の住人達の中から選ばれた里親に育てられる、とか。俺達も、そうやって『配られて』ここで育てられた。過去の経験から、一応人間が親の役目を果たさないと、碌（ろく）な人間が育たないらしい。

この階層の天井の高さは、だいたい場所で、3mか、それよりも低い。その部屋の用途によって、多少の違いはあるが。この階層は直径30kmの円形で、円形階層の中心には直径約10kmの同心円の壁が設けられている。（この壁の内側に何かあるのかを、我々は知らない。）換言すれば、この階層は平たく潰されたドーナツのような形をしている。

この建造物は、どうやら Towerld として知られ、TTT (Towerld Totalitarian Transmission、トゥリプル・ティー) と言う名のシステムに制御されているらしい。この階層では誰も Towerld の意味を知らないが、「TOWER」(塔)と「woRLD」(世界)を複合させて出来た名称、つまり「塔世界」だと言われている。

TTTは、我々の生活面での面倒を見てくれる。（この支配力は、建造物全体に行き渡っていると考えられる。）電気、瓦斯 (gas)、水道、下水も、TTTに制御されている。住人達のデータベース (アカウント、名前、IDコード、パスワードを含む) を把握しており、我々の全てを知り尽くしているようだ。

住人全員にアカウントが割り当てられ、ID コードやパスワードも与えられる。住民として認められた者達は、ID カードもしくは生体認証を用いてシステムに接続して、大抵の物事が行なえるようになっている。

俺の ID コードは、Hector_1304。名前と番号の単純な組み合わせだ。苗字なんてそんな洒落たものは、家族の概念の存在しないこの社会には有り得ない。番号を使うのが面倒くさいから、結局俺は『ヘクトア』で通っている。しかも、番号は（俺が昔何処かで読んだ文献に拠れば）昔から不吉とされている「13」と「0」と「4」の組み合わせだ。偶然としか思えないが、俺は呪われているのか？

---03---

残念ながら、俺達の人生同様、TTT も完璧とは言い難い。徐々に迫（せ）り上がり続ける水位を放置している時点で、完璧な筈が無い。天井が少しずつ低くなる空間なんか、不完全そのものだ。

信じられないのだが、住民達は概（おおむ）ね現状に満足している模様。正直、そんなに辛い生活では無いから、その気持ちは解らない事も無いが。飢餓を心配しなくても良いし、病気も戦争も無い。

教育制度が比較的しっかりとしているから、我々の先祖がこの建造物の外側から来た事位は理解している。自分達がこの建造物の囚人以上の何者かである事だって、解っている筈だ。だが、解らない事柄や知らない事実ばかりだ。TTT の正体、この建造物のサイズ、外の世界の様子、俺達が存在する理由、そしてその他様々な事柄。俺達は、多くの質問や疑問に対する解答を得られないでいる。意図的に知らせられていないような気もするし。（知らなくても、それなりの生活が出来るから、性質（たち）が悪い。俺も偉そうな事を言えないのだが、誰もなかなか立ち上がって何かをしようともしない。）

「無知は幸福」とも言うし、な。

だが、俺が習った人類の歴史の流れでは、「平和が一瞬にして消滅する」パターンは永遠に繰り返されるのだ。

---04---

幾年前前から、フロアの浸水が進んでいる。住人は誰もその水が何処からやって来るのかを知らない。噂に拠れば、この階層よりも下の階層から水が溢れているらしいのだが、そこで我々はここよりも下の階層が存在する事を知った。（考えてみれば、俺達はこの建造物の大きさをも把握していないし、ここよりも下の階層があっても不思議は無い。）ここよりも下の階層は完全に水没しているようだ。もっと下の階層がそのまま何処まで続くのか？ どうやら光が届かない程に深いらしいが。人間が潜（もぐ）って調査できる深さでは無さそうだ。

白状すれば、実は俺もこの長引く洪水を無視しようとした。TTT が水を汲み出してくれる事を心の何処かで期待していた。本来ならば住人を助けるための全自動化システムだろう？ 結局、TTT は何もせずに浸水を放置した。（まるで洪水にする事が目的であるが如く。）

部屋と部屋を繋ぐ廊下や公共の大部屋だけが浸水しているのであれば、まだ何とか出来たであろう。だが、自分達の部屋や寝室が常時水に浸かっていると、精神的にも肉体的にも休まらない。足が濡れていると、水虫を恐れなくてはならないし。掬（すく）いたくなる程度には水が

綺麗なのが救いだろうか？火を通せば調理にも使える水なのは良いのだが、だからと言ってそれで心が安らぐとは限らない。

生命の危機と言う程に深刻でも無いのも事実だ。TTTが水を汲み出すのを待ち続けるのを諦めた俺達は、結局水と共に暮らす事にした。別に悪い事ばかりでも無い。いつでも好きな時に水泳に興じる事も出来るし。それに、俺達は水と共に移り住んで来た魚介類を捕まえて、それを何故かタイミング良く新設された魚市場に売って、それで生計を立てる方法を考え付いた。何処から来るのか知らないが、獲れる魚介類の種類は豊富だ。

この階層は、巨大な漁獲場に変換されたようだ。

(それにしても、誰が魚市場を設置したのだ？この洪水を最初から予測していたかの如く、だな。)

漁獲にも、様々な方法がある。ある者は生け捕りにして、戦利品を水に浸けた籠の中に入れたまま泳いで魚市場まで運ぶ。(活きの良い魚を比較的簡単に運搬できるのが、浸水を歓迎する数少ない理由の一つだ。)魚市場の監督(何者だかよく解らないが)は、新鮮な魚にはより多額の金額を支払うし、生きている魚であれば更に高額になる。正直、俺も自分のアカウントに記録される預金額(TTTが管理)が潤うのに対しては、悪い気分にはならない。

それにしても、この生活が延々このまま続くのも、どうだろうか？現状維持であれば、何とかなるかも知れない。だが、状況は常に変化している。水位が高くなっているのだ。水位が低ければ、まだ水没していない家具の上などに逃げる事も可能。身体をタオルで拭いてドライヤーで乾かす事を忘れなければ、乾いたベッドの上で寝る事も出来る。最近では、二段ベッドの上段にしか逃げられない。下段は移動手段として使用するボートの埠頭としてしか機能しない。冗談じゃないぜ。

---05---

ボートの上で暮らすのって、何かの難民みたいだよな。

もう、迫(せ)り上がり続ける水面と天井の間の空間が限られて来ているのだ。このままでは、水中でも呼吸が出来るように進化するしか無いのか？

水面が天井に届く前に、俺達は溺死しないか？

ここでじっと指を銜(くわ)えて待つのか？「TTTが何かをしてくれるさ」なんて暢気(のんき)な事を言う者もいるが、低くなり続ける天井が俺の精神に与える圧迫感に俺は我慢できない。

---06---

ここで解る事は、ここで何かをしなくてはならない事だ。先ず動け。話はそこからだ。

先ず何処へ向かうべきか？

俺はこの建造物について殆(ほとん)ど何も知らない。この建物の外側の世界も知らない。一応、教育の一環として一通りの事を学ぶから、我々の起源やら先祖や祖先の概念を理解は出来るのだが、結局このままではこの建造物の内部で多くを経験しないで一生を終える。俺達は、この閉ざされた世界の囚人として朽ち果てる運命なのか？

当然の事だが、このように閉鎖された世界での営みを強要されると、他の階層や外の世界に対する好奇心が旺盛になる。俺は、外の世界で、本物の青空や夜空を眺めたい。無限の奥行きをこの両眼で確認する時、衝撃の余りに俺は生命（いのち）を落とさないだろうか？それに、俺はこの世界を取り巻く多くの謎を知りたいのだ。旅に出たいのだ。

千段の階段も、一歩から。

魚市場へ向かおう。そこから、俺の脱出の旅が始まる。

Part Two

---01---

この浸水した階層の何処へ行っても、見えるのは廊下と部屋ばかり。天井は、全般的に低い。中には、講堂やロビーや広間や吹き抜け等、天井の高い部屋もある。

階層の軸と同心円の壁に隣接するように、階層の経済の中心として機能するロビーがある。

階層全体が浸水して間もなく、得体の知れない輩（やから）が何処からとも無くやって来て魚市場をロビーに建設して、監督としてその魚市場を仕切るようになった。（まるで洪水を最初から計算していたかのようで、胡散（うさん）臭い奴等だ。）

この浸水した階層の住人ならば、魚市場が何処にあるのかは知っている。そして、魚が様々な階区から来るのも、解っている。だが、魚市場の次に魚が何処に行くのかを、実は殆（ほとん）ど誰も知らない。魚はこの建造物の外側に放り出されると言う者もいれば、ここより下の階層に戻されると考える輩もいる。俺は、魚は何処かで料理の材料に使われると考えている。魚市場が活きの良い魚や生きた魚により高い金額を支払うのは、料理の材料として重宝されていて売値や市場価格が高騰しているからに違いない。

魚市場の監督は、どうやら余り住民に多くを知って貰っては困る模様。俺も何度か監督と呼ばれる者に魚の調達序（ついで）に質問を投げ掛けた事もあるのだが、その都度（つど）魚市場から力づくで追い出された。

---02---

限られた時間で得られた情報は、これ位で精一杯。

魚市場には、小型運搬エレベーター（ダムウェイター）が複数設置されていて、魚市場で働く者達はその中に市場に集まった魚を入れる模様だ。だが、運搬エレベーターが何処へ向かうのかを、俺は知らない。上昇するのか？下降するのか？魚を加工するのか？横に流れるのか？魚市場の作業員達でさえも知らないのでは？どうせあいつらも TTT に服従しているだけで、給料がアカウントに入ればそれで満足だから、ダムウェイターが何処に向かうのかなんかに興味を抱かないのだろうよ。

ダムウェイターに乗って、この浸水階層から脱出しようと何度も考えたが、その度に諦めた。先ず、運搬用の金属の箱が俺には小さ過ぎると思うし、そこに乗せられた魚が何処に向かうのか解らないから、危険が多い。ダムウェイターが魚肉加工工場か何かに流れるのだとすれば、それに乗った俺はどのような運命を迎えるのか？切り刻まれたり煮られたり焼かれたり挽き肉

にされたり釜茹でにされたり薬品漬けにされた挙げ句に、魚肉ソーセージの材料にされたら、一溜（ひとた）まりも無い。

別の計画を採用した方が良さそうだな。

Part Three

---01---

魚市場に出向くには、魚が必要。魚が無くては、入場を許可されない。魚市場の入り口を見張る少々おっかない連中に門を開けさせるために、俺はでかいマグロを獲（と）った。これは最初の大事な一歩だ。俺は別に階区の連中との強い絆（きずな）を感じていないし、所詮は血縁も何も無い寄せ集めの孤児同士だ。離別（わかれ）の言葉を告げたりはしなかった。（正直、面倒くさい。）

魚市場の連中は、大金に繋がりやすい大型の鮮魚を優先させる。水中で移動可能な魚籠（びく）にマグロを入れ、泳いでその魚籠を引っ張って、魚市場に向かった。魚市場の門を見張る用心棒達は俺の戦利品に対する驚きを隠そうともせず、そのまま魚市場の中心部に案内してくれた。（重要人物やら上客として扱われるのって、悪くないな。）

---02---

このでかくて活きの良いマグロを魚市場の作業員に手渡し、俺の口座に結構な金額が振り込まれるのを確認した。（この旅で、俺は今後自分用のアカウントのお世話になれるのだろうか？）

作業員達が複数束になって俺の捕獲したマグロと格闘し、数の暴力に頼りながら無理矢理ダムウェイターに押し込もうとしている。やり方が下手だな。生け捕りにした魚ならば、脳天をハンマーか何かで殴ればいいのに。

俺には好都合な展開だ。こいつらの注目がマグロに集められている間、俺はこの場をあとにした。

---03---

魚市場のとある場所に、階段がある。賑やかな魚市場の中心部からそれ程に離れてはいないのだが、階段付近に人影は少ない。階段には、衛兵が1人配置されているのみ。

この階段は、長い。どうやらこの浸水した階層よりも上の階層に繋がっているらしい。階段の最上段には巨大な扉が設置されている。その鉄扉は透明では無いので、その扉の向こう側に何があるのかを、俺のみならずここの住人の誰もが知らない模様。

水位が上昇し続けるこの階層から脱出しようとしているのは、俺だけでは無い。これまでも幾人かの住人達が脱出を試み、この階段を登って衛兵を倒して扉を開けようとしたが、誰も成功していない。

衛兵は、「階段衛兵」（Stairway Shieldian）と呼ばれている。階段の上では、奴は無敵らしい。階段こそが、奴の舞台。階段を駆け上がったたり駆け下りたりする動作を、普通の人間が平坦な床面の上を移動するよりも素早く行なう。普通の人間は、足を踏み外して足首を捻（ひね）るのを恐れて階段の上では躊躇（ちゅうちょ）しがちだが、「階段衛兵」は階段の上では寧（む

し)ろ速度を上げる。階段の高所から低所に向かって飛び込んで足首を捻らないで着地するのも、お手の物だ。

しかも、階段を武器として活用するらしい。「烈風破棍(れっふうはこん)」とか、「高原落とし」等、訳の解らない名称の技を使うらしいが、どの程度の代物(しろもの)かを知る者は確認されておらず。(それを目撃した者は、生きてそれについて語る事が許されないのだろうか?)

奴は別名、「階段蜘蛛」としても知られている。蜘蛛の巣を身体の一部や武器として巧みに操る蜘蛛の如く、だ。

俺だって負けてはいられない。俺も来(きた)るべき日々に向けて武術の練習を重ねて来たのだ。確かに、武術の達人では無いのは認めるけどな。俺だって魚を獲るので忙しいので、稽古に多くの時間を割けない。だから、漁業の生業(なりわい)に武術の鍛錬を工夫して盛り込んだ。例えば、生け捕った魚と素手で格闘したり、鈍器で上手に殴って魚の気を失わせたり。

俺はこの「階段蜘蛛」を倒し、奴が見張っている鉄扉を開けて、この浸水している階層から脱出しようとしている。この俺の旅の始まりを象徴するに相応(ふさわ)しい程に派手な行動だよな。

何にせよ、「階段衛兵」や「階段蜘蛛」として知られる強敵を倒さなくては、何も始まらない。

---04---

こいつは、強そうな雰囲気醸し出している。気が弱い奴ならば、一目で戦意喪失だ。

兵士が着用するようなポケットや防具だらけの黒い軍服を着用している。ヘルメットには有色のヴァイザーが装着され、顔面の表情が隠れている。服で隠れて見えないが、肉体もかなり鍛えられていると俺は見ている。腰のベルトにはホルスターが装着され、その中にはトンファー型のサイドハンドル付きの警棒が1挺収められているだけだ。「それだけあれば充分」とでも言いた気だな。上半身を隠せそうな縦長の防楯を左肩に担いでいるが、その大きさから察するところ、防御力のみならず機動力や(武器としても使える)汎用性をも兼ね備えているのであろう。

俺だって無計画のまま強敵との闘いに臨(のぞ)む訳では無い。計画(Plan A)が倒れれば、次善の策(Plan B)に切り替えれば良い。それが駄目ならば、そのまた次の策(Plan C)がある。データの場合同様、計画のバックアップは多めに準備すべきだ。

まずは、ここで指を差して挑発だ。

「おい、その階段難民!聞いているのか?そうだ、てめえだ!」

俺の声は通るな。(もう少し上品な言葉遣いにすべきだったか?)

だが、「階段蜘蛛」は微動だにせず。俺の存在に気付いていないのか?

結局、俺から先に動く事になってしまった。本当は奴をこちらに誘(おび)き寄せたかったのによろ。(奴の沈黙に恐怖している事実を、俺は認めたくは無い。)

膝まで水に浸かっている状態で階段まで移動して、階段を登った。数段か登ったところで、俺の防水長靴も水面から出た。水から出ると、何故か安心する。結局俺も陸上での活動を前提と

している歩行動物なのか？魚では無いのに無理矢理浸水した環境に適応しようとする行為そのものに無理があるのか？

俺と「階段衛兵」の間の距離が徐々に縮まる。正直、俺はこの強敵には余り近付きたくは無い。

階段の途中で、俺は足を止める。相手は、一步も動かさず。奴の任務は、背後にて聳（そび）える鉄扉を死守する事。現在、奴は背中を扉に貼り付けているが、そこから動く必要が無い。俺が誘き寄せているのに、気付いているようだ。

---05---

俺と「階段衛兵」は互いを睨（にら）んだ。奴は階段の最上段から俺を見下（みお）ろし見下（みくだ）している。

「俺がこのまま階段を登れば、俺のためにその鋼鉄のドアを開けてくれるのか？」

「何を言いたいのだ？」

お？俺の挑発に乗り始めたか？いいぞ、いいぞ。

「その扉を開けさせるには、貴様を叩きのめして鍵を奪えばいいのか？」

こいつから情報を得るには、質問で攻めるのだ。この関門を突破する糸口を、情報から攫（つか）めれば良いのだが。

「確かに俺は鍵を所有しているのだが、それを奪っただけでは扉は開かないぞ。貴様の ID コードや特殊パスワードを入力しないと、意味が無い」

それは予想外だ。俺の ID コードと「俺」専用のパスワードでは、駄目だよな。

「ならば、貴様を倒してパスワードを聞き出せば良いだけの話だ」

「それは、無理だ。俺だってそのパスワードを知らないのだ」

得意そうな声色で言うな。（それにしても何だ、この脱力感は？）

仮に奴が本当の事を言っているのであれば、ここで俺がパスワードを聞き出すためにパスワードを知らない敵を相手に闘う意味が無い。

始まってもないに等しい旅をここで終わらせないためにも、ここでちょっと計画の軌道修正を行なわないと、な。

とにかく質問攻め（責め？）で時間を稼いで、次の計画を練るのだ。

「任務を遂行する上で重要なのは、何だ？」

「防御は、最大の攻撃だ」

つまり、こちらが攻撃を仕掛けなければ、何も出来ないのだな。

「貴様程の者が、ここで何をしている？」

「見ての通り、俺はこの、何処かへと繋がる扉を見張っている」

何故、そこで躊躇（ためら）う？何か言いたくも無い事を言ったのか？ここは突っ込んでみる価値がありそうだな。

「『何処か』って、この扉の向こう側に何かあるのかも知らないのかよ？」

「知るかよ。そんなの、俺の知った事では無い」

ここで俺の挑発が加速する。

「何かを知りたいって、思わないか？何も知らないで、正体不明の何かを見張るって、気持ち悪くないか？」

「別に知らなくても、俺の任務には何の影響も無い。俺はここで番人としての務（つと）めを果たし、一日の仕事が終われば、あとはメシ、風呂、寝る。それだけだ。それで給料を貰えるのだぜ。これ以上の何を欲するのだ？」

「詰まんねえ人生だな。そんなの、人生じゃねえよ。お前は番人じゃなくて、番犬だろ」

「何だと？」

「水が怖いから、自ら水から離れられる階段上での番犬としての仕事を選んだのか？水を恐れる狂犬病そのものだな」

「口を慎めよ！」

よし、怒（いか）っているぞ。怒れば、正常な判断力を失う。

「俺に黙って欲しければ、階段を降りて来いよ」

「そんな見え透（す）いた挑発には、乗らん」

ちっ。

ここで、ちょっと誘導尋問で情報を引き出すとするか。

「給料を貰うだけで満足する貴様は知っているのか？誰が給料を払っているのだ？」

（実は俺もその答えを知りたいのだ。）

「知るかよ？我らが TTT 様だろ？」

それだけかよ？他に何か言う事は無いのかよ？質問を続けなくては。

「この巨大な建造物そしてその『万知万能』の TTT 様とやらを誰が所有しているかを、知りたくないのか？」

「そう言う貴様は、この建造物と TTT を司（つかさど）る者の存在を知っているのか？」

こいつ、上手く切り返したな。俺が答えられない質問を投げ掛けるとは。こいつも、実は質問され慣れているのか？

ここは俺も正直に答えるしか無い。

「ここで認めたくは無いのだが、俺も知らないのだ。住人がこの建造物の囚人であるのと同様に、俺は自分の無知の囚人と化している」

このような言い回しをすれば、頭の弱い奴は混乱する筈だ。

「ならば、囚人としての自分の運命を受け入れて、この俺と鉄扉を突破する事を諦めるのだな。この先に何かあるかなんて、知らない方がいいだろ？無知は幸福だ」

これ以上、こいつから情報を引き出せそうにも無いな。こいつは番犬としては使えるかも知れないが、番犬以上の何かになろうとする野心のようなものを感じさせない。

覇気の無い奴は、破棄だ。

---06---

この「階段衛兵」を相手に闘って得られる物は、何も無い。ならば、無駄な闘いを回避するのみだ。

「じゃあな」

俺は鉄扉と「階段蜘蛛」に背を向け、手を振りながら階段を下りて足を水に入れた。

俺の「階段衛兵」への興味は急に薄れてしまった。こいつの戦闘能力（と言うか、防御力）は高いと思うが、それだけだ。鉄扉の見張りの任務同様、こいつは詰まらない奴だ。

ここでちょっと捨て台詞を浴びせてやるか。

「TTTのイヌならば、先ずは舌に水虫薬を塗ってから、ご主人様の足でも嘗(な)めていなよ」

「何を言いたいのだ？」

「鋼鉄の扉に背後を許している時点で、貴様も噂程の戦士では無い様子だな」

「俺を見下すのかあっ？許さねえ！」

言う事が、安っぽいな。こいつへの興味が失せたら、どうでも良くなった。

怒りのために判断力を失った「階段蜘蛛」が蜘蛛の巣から離れるのを、多少は期待した。だが、期待は期待で終わってしまった模様。

「階段衛兵」は何かを怒鳴っているのだが、持ち場から離れる程に正気を失っている訳では無さそうだ。番犬としては優秀なようだな。それは、認めよう。

俺の次の標的は、魚運搬用のダムウェイター。

Part Four

---01---

魚市場の中心部に到達すると同時に、俺は魚市場の監督の手下達に囲まれた。以前から監督が怪しいとは思っていたが、ここまで解り易い反応を示すところを見る限りでは、胡散臭（うさんくさ）さを隠す気も無い様子だ。こいつらは、TTTでさえもが制御する価値も無いと判断したどうでも良い事に手を出すために結成されたのだろうか。（TTTが人間に汚れ仕事を押し付けているみたいだな。人間が暇になって反乱を起こしたりすると困るから、態（わざ）と人間を忙しくさせているのだろうか？）

俺も一応普段から鍛えているから、肉弾戦でも負けないぜ。（数で押し切られているような気がするが、気にしない事になっている。）

膝から下が水に浸かっているから、機動力が限定されている。素早く動いて包囲網から逃れる事を考えない方が良さそうだ。俺を包囲する円が徐々に収縮している。

この暴漢達は、それぞれの手にトンファーや鉄パイプのような武器を携（たずさ）えている。今の俺は丸腰だが、武器が欲しければ相手から武器を奪い取れば良い。戦闘中に相手の武器を略奪する方法を、俺は練習してきた。この技を活用すれば、自分の攻撃力を強化できると同時に、相手の攻撃力を下げられる（自分の防御力を上げられる）。それにしても、これ程に攻撃と防御を同時に盛り込んだ技って、そうは存在しないよな。（自分の武器を常時所持しなくても済むので、身軽に出来る。）

---02---

ここで、この暴漢達の戦闘能力を分析しないと、な。俺が「階段衛兵」との対決を避ける事が出来たのも、俺の分析能力のお陰なのだ。誘導尋問を投げ掛けて、こいつらから情報を吸い出そう。

「一体どうする積もりだ？まさか、俺を倒して鉄鎖で簀巻（すま）きにして魚と一緒に運搬用ダムウェイターに放り込むのでは無いだろうな？」

暴漢達は互いを見て、何か言っているぞ。

「おい、聞いたか？」

「いい考えだな、それは」

莫迦（ばか）共が。

「貴様を叩きのめしたあとに、お望み通りに簀巻きにして魚と一緒にダムウェイターに打（ぶ）ち込んでやる」

それで俺を脅している積もりかよ？俺が言った事を繰り返すのでは無く、もうちょっと捻（ひね）ったらどうだ？尤（もっと）も、それ位の頭脳の持ち主であれば、魚市場の暴漢で一生を終えたりはしない。

「自分の首を絞めたな」

「へっへっへっ」

「けっけっけっ」

こいつらは血統書付きの負け犬だ。魚の餌にも値しない。

---03---

先手必勝。こちらから動くぞ。

俺は水面に飛び込みながら前進した。漁業は俺の生業（なりわい）。水を味方に付けるのは、お手の物だ。

この死人同然の生ゴミ共は、常に楽な道を求め続けて来た。だから、漁師に成る道を避け、唯（ただ）の魚市場の破落戸（ごろつき）で終わっている。水上での動きは鈍い。怠け者には、この働き者の俺様が罰を与えてやる。（人生に、王道も直通エレヴェイターも無いんだよ。Towerldに直通エレヴェイターがあれば、こんな面倒くさい事をしなくても最上階に行けるよな。）

まずは、鉄パイプを握る暴漢に、飛び込んだ姿勢のまま接近した。

俺の動きに反応して鉄パイプを振り回しているが、無駄の多い軌道は水面からかなり離れている。こいつは高くスイングするのには慣れているようだが、普段から水でパイプが濡れるのを恐れているからか、低く振り回すのは苦手の様子だ。

鉄パイプは純粋な鉄では無く合金鋼で出来ている。だから、水で錆びるのを恐れる必要が無い。そんな事さえも知らない程に、こいつらは無学なのか？無教養だから暴漢で終わっているのだな。

腰の入っていない鉄パイプの一振りには、このパイプ使いの足許（あしもと）に潜（もぐ）り込んだ俺の背中を擦（かす）ったが、痒（かゆ）み止めには丁度いい程度だ。この体勢から、相手の足首を攫（つか）んで（水の浮力の助けを借りながら）力任せに持ち上げて立ち上がり、その勢いで相手のどうでもいツイラを水面に押し付けた。呼吸するための空気を求めようとするが余りに、暴漢はそれ程に愛着を抱いても無さそうな武器を手放し、水底に両掌（てのひら）を押し当てて顔を出した。

予想通りだ。

俺は鉄パイプを拾い上げ、まだ起き上がれない暴漢の顔面を俺の防水長靴で水面下に押し戻し、鉄パイプを振り下ろして水面下の頭を殴って気絶させた。水が衝撃を和らげてくれたから、殺してはいないだろう。ハンマーで魚を殴って気絶させる要領だ。

俺は普段から真面目に仕事をしているから、普段から怠けてばかりの破落戸に負ける筈が無い。でかい魚と格闘する事を考えれば、こんなどうでも良い奴を気絶させるのは簡単だ。

---04---

少なくとも、俺は武器を手に入れた。ハンマーで魚を気絶させるのは得意だから、この鉄パイプで俺の特技を活かされる。

念のために、俺の足許にて浮いている暴漢の頭を鉄パイプでもう一度殴って、本当に気絶している事を確認した。

先程に、俺は手の内を見せたから、もう奇襲攻撃は通用しない。ここからが、本番だ。問題は、この数的に不利な状況をどう打破するかである。漁師としての仕事は、数の暴力とは縁が無いから、俺も実は慣れてはいない。

---05---

暴漢が3人、横に並んだ。俺から向かって左側から、こいつらの武器は、2挺のトンファー、1対のブラスナックル、そして棍棒。共通点は、俺が今、手に握っている鉄パイプ同様に、鈍器の部類に入る事か。（もしかして、こいつらも鈍器で魚を殴る事で生計を立てているのか？）余り鋭利な刃物が好きでは無いようだ。

1人ずつ、片付けよう。まずは、トンファー使いから。

俺は鉄パイプを水平に振り回した。

トンファー使いは俺の予想通りトンファーを垂直に構え、鉄パイプをブロックした。（攻撃にも防御にも使える武器ってのは、便利だ。）縦にして楯として機能しているトンファーに弾かれた鉄パイプを返ししながら、俺の背後に接近しているブラスナックル使いを攻撃した。ブラスナックル使いは、多分拳闘士で、ベルトから下への攻撃に対する防御を想定していないと考えられる。そこで俺は弧を描く鉄パイプの軌道をブラスナックル使いの下半身に向け、鉄パイプの先端を無防備な膝に入れた。

この拳闘士上がり（下がり？）は、絶叫しながら水面に顔面から倒れた。建造物の中であろうと外であろうと、現実の世界ではリング内のルールは通用しない。下半身を無防備にしていると、標的にされるだけだ。

2丁上がり。

棍棒野郎が俺の背後を取ろうとしている。（どうして、こう、下等生物ってのは、予想通りの動きしか出来ないのだ？俺を飽きさせない位に、行動パターンに少しは捻（ひね）りを盛り込んでみるよ。）俺の鉄パイプの方が、より長いリーチを誇る。防御が難しくなるように、鉄パイプを振り回さずに直線的に鳩尾（みぞおち）目掛けて突きを入れた。余程痛いのか、腹部を両手で押さえて身体を前に倒すように曲げて胃液と血液を吐いて周囲の水を真っ赤に染めながら水面に突っ伏した。

3丁上がり。

トンファー使いを忘れてはならない。どうも先程から余り動いていない様子だ。用心深いのか、水の上での動きが鈍いのか？（両方だな。）

ここで俺は水面をフットワークで刻んでリズムを刻み、相手に何度も背中を見せるように旋回運動を入れた。膝まで水に浸（つ）かっても、俺の動きはそれ程に鈍ってはいないぜ。旋回運動の遠心力に乗せるが如く無理の無いように鉄パイプを右に左に振り回した。トンファー使いは鉄パイプをブロックするので精一杯。唯（ただ）振り回すだけでは無く、時々突きも交えて攻撃行動を予測不可能にすれば、防御はますます難しくなる。

突きが、肋骨に入った。ツキが回らなくても、旋回運動で身体が回れば、問題は無い。（この手応えが、堪（たま）らないぜ。）

4丁上がり。あと、あと、9人。

9人だと？ちょっと待てよ。増えていないか？

---06---

どうやら3人組に時間を掛け過ぎてしまった模様だ。相手は戦力増強の時間稼ぎのためにこの3人を犠牲にしたのか？

「うぐっ」

俺の背中に何かが突き刺さった。

暴漢の内の1匹が、クロスボウで麻酔ダートを撃ち込んだようだ。ダートを慌てて引き抜いて、その模様を確認した。もう、薬物が体内に巡っているのを感じる。ダートの色彩や模様から察するところ、生命の危険を案じる必要は無さそうだ。だが、意識を失うのも時間の問題。水上で突っ伏（ぷ）して倒れると呼吸できないから、水から出て乾いた床面の上に避難した方が良さそうだ。

意識を失う直前に俺が見たのは、顔面に迫る鈍器。下等生物から正々堂々とした闘い方を期待するのが、愚かだよな。

---07---

プランAが失敗すれば、プランBに移行すべきだ。いや、プランCだったか？思い出せない。

Part Five

---01---

目を覚ませば、俺は可也（かなり）不味（まず）い状況に追い込まれていた。

俺は金属の箱に押し込められていた。魚を魚市場から別の場所へ運搬するためのダムウェイターだ。身体を起こして状況をより深く把握しようとしたが、それは無駄な事。全身が、俺が先程に魚市場に売ったマグロと一緒に、鉄鎖と錠前で簀巻きにされている。俺が自分と同じ位の大きさのマグロを胸の上に抱えている格好になっている。俺の胸板と錠前が、マグロを挟んでいる状態だ。ここまで行動の自由を奪われていれば、身体を揺らすだけで精一杯。

横たわったまま首を捻ってダムウェイターの外を見渡せば、先程俺が相手にした暴漢達がいた。数量の暴力と飛び道具に頼らなくては、俺に勝てない負け犬かよ？俺は、その負け犬を相手に負けたのか？しかも俺を魚のように扱いやがって。

---02---

「おい、これはどう言う事だ？」

この質問には特に意味は無い。相手から情報を吸い出して、次の手を打つには、これが効果的だ。

暴漢が勝ち誇ったような阿呆面を見せて、俺の顔を覗き込んだ。（莫迦（ばか）が感染するから、近寄るなよ。）

「おめえは負けたんだよ。抱いているのは、女では無く、マグロ女でも無く、マグロだ。俺らの神経を『サカナ』でした罰だ。驚けよ。魚（ギョ）ッでも魚（ウオ）ッでも構わんからよお」

周囲の暴漢達は、何が可笑（おか）しいのか、腹を抱えて笑い転げた。しかし、詰まんねえ。実に、下らない。

俺が質問するまでも無く、破落戸（ごろつき）が次から次へと得意気に状況を説明してくれた。

「おめえがどうしてマグロを抱えているか解るか？ここで俺等は賭けをする事にしたのだ。ここから先にあるのは、精肉工場。そこで、お前が人間として処理されるのか？それとも、魚として扱われるのか？工場のラインは自動制御されているから、どう判断されるのかが、見物（みもの）だよな」

「刺身として切り刻まれるか？缶詰にされるか？オイル漬けにされるか？挽き肉にされるか？腸の袋に詰め込まれてソーセージにされるか？播（す）り身にされるか？」

「何にせよ、いずれそのうちに解るさ」

「今夜の食卓で、この賭けの結果が判（わか）る。お前が何になるにせよ、魚のエサにしてやるから、安心して死ねよ」

どうせ負け犬だから、魚から俺を横取りするのだろう。（こいつらに食われれば、魚のエサになるよりも屈辱的だ。）

「俺の予想では、てめえは魚として扱われるだろうな。何故か解るか？こんな魚と人間の合成獣を見れば、工場のラインは「こんな化け物、実際にイルカよ？」て思うに違いないからだ」

詰まらん駄洒落に対する沸点の低さも、無教養な輩の特権か？その場で笑っていないのは、俺だけだ。それに海豚（いるか）は魚類では無くて哺乳類に属するのだが。勉強しろよ。

---03---

これは、非常に不味い。この暴漢達に囲まれた時に、俺と魚を簀巻きにしてダムウェイターに入れるように挑発したのは、俺だ。それも、万が一俺が負ける事態に備えて俺が仕掛けた罠だ。これは俺の計画の一部。プランAが失敗すれば、プランBに移れるようにしただけの話だ。現に俺はこうやってダムウェイターに魚と一緒に精肉工場に向かおうとしている。（ダムウェイターの向こう側に精肉工場があるのを、先程知ったばかりだが。）こうすれば、精肉工場に流される序（つい）で浸水したこの階層から脱出できるかも知れないのだ。この破落戸共は、まんまと俺の作戦に引っ掛かっている。尤も、俺もこの状態のままであれば精肉工場から脱出できないけどな。この「おまけ」は、邪魔だ。

「俺が精肉工場のラインで流されるのを、観察し続けるのか？」

「それは出来ないな。俺達は精肉工場に入れない。ラインはこのまま上の階層に向かう。知っての通り、郵便屋でも無い限り、俺達住人は勝手に別の階層に移動してはならないのでな」

そうか。郵便屋に転職するのも手だったな。今更遅いが。

俺がこのまま上の階層に向かえるのが解っただけでも、収穫だ。

「俺がどうなるのかを確認したいのでは無いのか？」

「お前とそのマグロには、通し番号が与えられている。えーと、何だっけ？」

「TKD_048150969113」だそうさ。だから、俺達はここで待ち続けて、同じ通し番号の製品をTTTで確認さえすれば、賭けの結果が判る」

俺は「通し番号」かよ？随分と、安く見積もられたものだな。

Part Six

---01---

俺の「パッケージ」旅行の始まりだ。

ダムウェイターの扉が閉まり、俺は箱ごと上昇した。上昇は、続く。まだまだ、続く。箱の上面の隙間から、ダクトが延々と続くのを確認できる。ダムウェイターの上昇速度や時間から、俺が既に「生まれ」故郷とも言える浸水階層から離れているのは解った。（正確に言えば、他の住人同様に、俺は「産まれた」のではなく「配達」されたのだが。）

全ては俺の計算通り、なのか？プランBだかプランCだか、もう訳が解らん。丁寧に通し番号まで貰ってしまうし。余り美しくは無いよな。

ダムウェイターは停止してから傾き、俺はベルトコンヴェイヤー上の別の容器（トレイ）に転がされた。もうちょっと丁寧に扱ってくれよ。魚類（さかな）や獣類（けだもの）だって、尊厳とやら言うものを重んじて貰う権利を抱くと思うが。

---02---

仰向けに寝転がせられているから、無骨な天井が目に入る。

その姿勢で何とか周囲を見渡してみれば、予想通りこのコンヴェイヤーは巨大な工場の一部であるのが解る。数え切れない程ある様々な種類のベルトコンヴェイヤーが縦に横に水平に垂直に斜めにあらゆる方向に流れている。ベルトの中には、籠や盆や皿のような容器を乗せているものもある。余りにも複雑に無数種類の方向にベルトが流れるので、3次元の空間だけでは表現できない位だ。時間が4次元目だとすれば、5次元や6次元も定義しないと、この空間を歪曲する程に複雑な工場ラインを説明できない。この工場では、俺の存在なんて打ち寄せる波に流される砂浜の砂粒のようなものか。

ベルト上に乗せられた物体を観察してみた。獣肉やら魚肉しか無いな。あらゆる製造段階の食肉製品が、縦横無尽に動いている。生肉もあれば、缶詰や刺身もあるし、ソーセージやハムもパッケージ肉もある。俺の視野に、食肉製品の全工程が収まっている。

---03---

俺が乗っているベルトの上にも、魚類や獣類が乗せられている。（人間は、俺だけの様子だ。）

ちょっと待てよ。先程俺が眺めた全工程の中には、完成品があったけど、このベルトに並んでいる動物の運命を物語っているのか？加工済みの製品は、どれもこれも生物としての原型を留（とど）めていない。つまり、製品として生まれ変わる事は、生物としての死を迎える事を意味する。製品が生（なま）であろうと加熱されていようと、このままでは俺が死ぬ事には変わりはない。

ここで当然疑問が湧く。「このまま俺は何処に向かうのか？」

俺が乗せられているベルトは、作業台らしき物に向かっている。作業台の真上には、何らかの探知装置やら感知装置のような機械が設置されている。その作業台に向かって流れるベルトは、複数あるようだ。そこで様々な角度から複数の装置が作業台の上に置かれた物体を調べ、振り分けるのか。作業台から出る複数のコンヴェイヤーに貼られたプレートには「獣肉」、「魚肉」、「野菜」、そして「その他」と書かれている。選別の第一段階としては、妥当とも言える。（野菜や獣肉は、この階層かもっと上の階層から運搬されるのであろうか？）

で、俺は何と看做（みな）されるのだ？俺は「獣肉」か？それとも、「魚肉」か？判別装置が俺を基準にするのか、それとも俺が胸の上に抱えているマグロで判断するのかで、俺の運命が決まる。この工場を支えている技術が進歩していれば、俺とマグロのパッケージは「その他」

に振り分けられるであろう。だが、この巨大な建造物の内部にて稼働中の機械が、そこまで進歩しているとは考えられない。

だいたい、TTT もこの Towerld と呼ばれる建造物も正直完璧には程遠い。完璧ならば、俺は今頃ここには居ない筈だ。Towerld を登り続ければ、完璧な何かに出会えるのか？生き続ければ、その解答を得られるかも知れない。

俺とマグロの組み合わせは、作業台の上に転がされた。（もっと丁寧に扱えよな。）各種装置があらゆる角度から俺達を調べている。他の生物の場合と比べて時間が結構掛かっているところを見ると、どうやら混乱している様子だ。

俺の事を、合成獣だと勘違いしていないか？胸に魚の頭を装着した、化け物とでも思っているのか？ここで警報が鳴らないところを見ると、合成獣の扱いには慣れているのかも知れない。まさか、ここより上の階層に行けば、合成獣しか居ないのでは無いだろうか？そんなフロアでは、逆に俺が化け物扱いされるに違いない。

「Towerld は実は合成獣養成施設」だなんて想像してしまった。（想像を中途半端に逞（たくま）しくしている場合では無い。）

---04---

で、俺は何様として扱われるのだ？さっさとしろよ！

魚かよ？どうせ魚として認められるのであれば、（存在するかどうかも知らぬ）神への供物（くもつ）として丁重に扱ってくれると有り難い、とは言えないか。

俺とマグロは、作業台の出口に転がされ、新たなベルトコンヴェイヤー上のトゥレイに乗せられた。付近のプレートには「魚肉」と書いてある。何だかなあ。俺の人間としての尊厳が損なわれたような気がする。

ベルトが向かう先を寝転がった状態で見れば、見えない程に遠くまで伸びている。無数の機械が森林の如く配置され、コンヴェイヤーの行き先が見えない。その金属の森林の入り口に巨大な機械が聳（そび）え立っている。俺よりも先を行く魚を観察しておけば、その機械が何のためにあるのかが解る。

その機械を通過したあとだと思われる魚が、頭部を切り落とされている。鱗を取ったり骨を抜いたりする前に、邪魔な頭を切り落とすのか。妥当とも言える手順かも知れない。

ちょっと待てよ。感心している場合か？俺も魚として選（よ）り分けられたのだから、俺も魚として首を切り落とされるのか？

これは、非常に不味い。これが、パニックと言う奴か？

全ては俺の計画通りの筈だったのだが、計画に狂いが生じたのか？いや、そもそもこの計画は最初から狂っていたのか？この俺の浸水階層脱出計画は、成功したと言えるのか？この時点では浸水階層からの脱出を達成しているのだが、この工場から生きて出なければ俺の世界の頂上への旅は始まらないし、脱出計画も成功したとは言えない。「生命（いのち）あつての物種（ものだね）」なんだよ。

何にせよ、このまま我が戦利品を抱いた状態でじっと待っていても、何か良い事が起きるとも思えない。俺の先を行く魚が、次から次へと頭部を切り落とされている。俺の運命を示唆しているのか？俺は、ここで死にたくは無い！

このコンヴェイヤーのトゥレイから逃げ出せば、断頭台を回避できる。だが、俺は鉄鎖と錠前で行動の自由を束縛されている。トゥレイに装着された固定装置が鉄鎖を攫（つか）んで離さないからか、俺は転がって逃げられない。トゥレイはベルトに固定されているから、力技でトゥレイと一緒に脱出する事も出来ない。人間の筋力で破壊できる程に、この工場の機械はヤワでは無い。

この鉄鎖や錠前さえ破壊できれば。何か道具や工具があれば。

俺は周囲を見渡した。俺は焦っていたから、意味の無い行動に出た事にもなかなか気付かなかった。仮に何か道具が付近にあっても、どうしろと言うのだ？鉄鎖から解放されるには、俺は道具を必要とする。道具を取るには、俺は鉄鎖から解放されないといけない。で、鉄鎖から解放されるには、鉄鎖か錠前を破壊しないとならない。その破壊工作を実行するには、道具が必要だ。道具を手許（てもと）に引き寄せるには、鉄鎖から解放されないとならない。だから、行動の自由をそこで得るには、道具が必要なんだよ。ならば必要な道具を手に入れろよ。そうするとだな、鉄鎖を振り払わないと、な。そうするには、道具が無いと話にならん。じゃ、道具を手に入れろよ。だ、か、ら、道具を手に入れるには、えーと、何だっけ？

ああああっ！まずは、鉄鎖よりも先に、この堂々巡りの呪縛から自らを解放せねば！

---05---

俺の先を行く魚は、あと3尾（び）。もう、時間が無い。

早く、速く、考えろ！あああ、その魚が断頭台に入った。

あと2尾。急げよ、俺！

あれは、鯀（ひらめ）か？そんな事は、どうでもいいっ！

鯀が、板の上に乗せられて、いや、だから。ん？

閃（ひらめ）いた！

この窮地で閃くとは、俺は天才かも知れない。

錠前を破壊できる程の刃ならば、すぐそこにあるでは無いか？俺またはマグロの頭部を切断しようとしている眼前に迫る装置ならば、出来ると思う。巨大な断頭台には、様々な切断用の道具が取り付けられている。円盤ノコギリに、大鉋に、糸ノコギリに、鉄斧に、ナイフ。種類が多過ぎて、俺にはよく解らん。切断する魚の種類に拠って、刃を使い分けるようだな。

俺は自分に迫る脅威を逆に利用して窮地から脱出しようとしている。自分の柔軟な発想に感心してしまうぜ。

あと1尾。感心している場合では無い。俺の作戦を試す余裕も無い。ぶっつけ本番だ。

この際、どの種類の刃が俺の首を刎（は）ねようとするかは、重要では無い。どれもこれも、俺の生命を奪うには十分な殺傷能力を抱いていそうだ。問題は、俺に襲い掛かる刃がどの箇所

を狙うか、だ。魚の頭部を切り落とすのがこの巨大な装置の担当する作業なのであれば、俺が抱えているマグロの頭部を正確に認識するのか？それとも、この俺を「胸にマグロを抱える合成獣」だと勘違いして、俺の首筋に刃の狙いを定めるのか？（まさか、この俺の事を「随分と醜い合成獣」だと認識しないだろうな？）

もう、俺の先を流れる魚が居ない。つまり、俺の番だ！

こうなれば、機械がマグロに狙いを定めると言う前提で行くしか無い。（他にどうしろと言うのだ？）俺は鉄鎖に簧巻きにされているが、抱えているマグロの位置を辛うじてずらす事ならば、何とかなる。（何とか、「する」！）マグロの胴体と頭部の間にある鰓（えら）が、俺の胸と錠前の間に挟まれるように配置すれば、マグロの頭部を切り落とそうとする刃は鋼鉄製の錠前に阻（はば）まれる。マグロの鰓付近を狙う事に集中するが余りに、力技で錠前を破壊してくれれば、俺は鉄鎖の簧巻きから解放される。

俺とマグロは、断頭台の上に乗せられた。俺の前面が天井を向くように向きを調整し、マグロと錠前が刃から俺を守るようにした。（ここが重要だ。）頼む、ぜ。俺の首は、無視して良いからな。錠前と俺の胸板に挟まれたマグロの首を認識してくれよ。お願いだ。

高速回転する円盤ノコギリが、振り下ろされた。刃が標的に接触するよりも先に、騒音が俺の耳を劈（つんざ）く。

円盤は、錠前に接触した。刃と金属面の間摩擦が、火花と雑音を周囲に散らす。

錠前は、回転する刃からの攻撃に耐えているが、これが永遠に続く事は有り得ない。

俺は刃の接触点から眼を離していない。錠前が破壊されると同時に簧巻きそして断頭装置から脱出しようと、俺は考えている。ここでは、タイミングと素早さが、文字通り生命（いのち）だ。少しでも遅れると、マグロも俺も錠前と同じ運命を辿（たど）る。鋼鉄製の錠前をも破壊できる電動ノコギリが、生身のマグロや人間をどうするか？誰にでも、その解答は明白だ。

眼を離すな。集中力を高めろ。その瞬間を、見逃すな！その刹那に、素早く脱出行動を決めるのだ。場合に拠っては、緩くなった鉄鎖を楯にして円盤ノコギリを食い止める事も考えられる。（それで脱出用の時間を稼げれば、儲け物だ。）

円盤が、徐々に錠前に食い込む。マグロと俺を守る防衛線が、どんどん薄くなる。もう、薄い金属の膜しか残されていない。

---06---

円盤ノコギリの回転が、止まった。頭部切断装置に取り付けられた各種パートも、その動きを止めた。ベルトコンベイヤーが静止した。どうやら、周囲の機械が生命を失ったかの如く、ストップした模様だ。その代わりに、警報が鳴り響いている。

一体、何が起きているのだ？円盤ノコギリも、回転しなければ怖くないな。それにしても、危なかった。あと少しで、マグロも俺も真っ二つにされるところだった。

何が何だか解らないが、ここで解るのは、俺がこの機会に乗じて脱出行動に入るべきである事実だ。真っ二つにされる寸前の錠前は金属の薄皮で辛うじて繋がっている。これならば、俺の力でも錠前を破壊できる。幸い、マグロを抱くような格好をしているので、手の届く位置に錠

前がある。ここで俺は力を入れて腕を動かし、錠前を手で攫（つか）んで真っ二つに割った。錠前さえ無ければ、鉄鎖は緩み、俺もマグロも簀巻きから解放される。

断頭台の近くに設置された管理制御用のモニターに表示されているメッセージを見れば、装置が何故停止したのかが解った。

「警告: 異物混入」

「流れ作業の邪魔をすると考えられる異物を除去せよ」

「異物を排除し、流れ作業を再開できると判断した場合には、『作業再開』のスイッチを入れる事」

ここに、俺は Towerld や TTT の縮図を見た。完璧には、程遠いんだよ。このようなエラーが生産ラインにて発生した場合には、人間が解決しないと行けないのだ。もう少し完全なシステムであれば、機械が自動的に解決しないのか？（完璧なシステムであれば、最初からこのようなエラーとは無縁だ。）

何にせよ、このままでは作業員がこちらにやって来て、エラーを解決しようとするだろう。俺がこうやって工場に潜入しているのがばれると、色々と不都合だ。

俺は手早く鉄鎖を解（ほど）いてから断頭台から降りて、マグロを断頭台の上に残し、付近の『作業再開』のスイッチを押した。

それまで静止していた機械が轟音と共に甦（よみがえ）り、警報が鳴り止んだ。俺と一緒に濃密且つ刺激的な時間をこれまでのどの女とよりも長く過ごしたマグロが、一瞬にして頭を切り落とされた。さらば、俺の愛しきマグロよ。一步間違えれば俺も一緒に死んでいたかと想像するだけで、気分が悪くなった。

俺はこの頭部切断装置をあとにした。全ては俺の計算通りとは言い難いが、計算が狂えば、別の計算で修正すればいいさ。

Part Seven

---01---

この格好のままでは、怪しまれる。浸水階層では、常に防水長靴を着用していた。この乾いた床の上でそんなものを履いていても、侵入者である事が一発でばれるのみ。また、あの魚類への先祖返りを本気で検討させるような日々に戻りたくは無い。

工場のスタッフが仮に制服の着用を義務付けられているのであれば、それを入手しないと出来ない。

取り敢えず周囲を見渡した。機械の森林の間に通路みたいなものが幾つか見受けられる。誰も居ない。この工場は自動化されているから、余り人間を必要としていないのか。

それにしても、この工場も TTT に管理されていると思われるが、何だか杜撰（ずさん）だ。監視装置も設置されていないのかよ。この TTT 特有の「いい加減さ」には、感謝しないとな。

（TTT が完全無欠であれば、俺が住んでいた階層も浸水していないだろうに。）

流れ作業のコンヴェイヤーや無数の機械に依り構成される森林の中に、休憩所らしき空間がある。ロッカールームか？ロッカーには、制服が掛けられていた。

誰も、居ない。これは、チャンスだ。

ポケットで埋まった灰色の繫（つなぎ、カバーオール）を手に取り、俺が既に着用している普段着（シャツにズボンに防水長靴）の上からそれを被った。何かの理由でこの工場制服を脱ぐかも知れないから、下に保険として普段着を着用しておいた方が良く。このカバーオールはゆったりとしているから、普段着を下に押し込んでも苦しくない。あとは、グレイの制帽で顔の上半分を隠せば、部外者である事がばれないで済む。

一応、ロッカーに貼り付けられた鏡で、自分の制服姿を確認し、如何にも作業員と言った雰囲気醸し出すようにした。

---02---

カバーオールの制服を着用するだけでは無く、作業をしている男の雰囲気を出すために、息を吸い込んで胸を張り、真っ直ぐより少し上を（仰角約5度で）眺めながら、堂々と歩き始めた。俺は普段から漁師として一生懸命に働いていて、身体を張って頑張っているから、肉体は結構鍛えられている。だから、このゆったりとした制服に呑まれる事も無く、逞しく見える筈だ。このような形で、普段の真面目な仕事振りが活かせられるとは思わなかったな。（それにしても、俺の制服姿は、自分でも惚れ惚れする位だぜ。これが、制服の魔法って奴か？）

何処へと向かうのでも無く、狭い通路を突き進んでいると、正面から緑色の制服を纏（まと）う作業員が3人こちらに向かっているのを確認した。

こいつらを見無視して通り過ぎようとしたが、考え直した。そうしたら、避けているみたいで怪しまれる。自然な形で声を掛ければ、大丈夫であろう。

作業員達は俺の顔を見るなり硬直し、通路の壁に一列に並び、俺に道を譲った。俺は、重要人物なのか？しかも、敬礼しているぞ。

どうやら、俺が着用している灰色のカバーオールは、下っ端の工員の制服では無い様子だ。

このまま通り抜けると、怪しまれるよな？俺の事を上司だと思っているのだとすれば、やはりここで俺が声を掛けるのを待っているのだろうか？ここで、上司の威厳って奴を醸し出すのだ。胸を張って、目付きを鋭くすれば、大丈夫だろう。

「状況を、報告せよ」

こう言えば、大丈夫だ。短い一言だから、汎用性が高い。誰かさんの所為（せい）で、先程警報が鳴り響いていたし、この下っ端達が予測していた俺からの一言は、どうせそんなところだろう。俺が上官だと思われていると言う前提で、俺は即興で演技をしたのだが、こんなところかな？

予想通りで、計算通りだ。

緑色の制服を纏う作業員のうちの1人が、声を上擦らせて報告を開始した。

「は、はい。警報が発令されましたので、現場に向かって調べましたところ、真っ二つに破壊された錠前と鉄鎖が魚頭切断機の近くにて落ちていました」

しまった。俺が脱出した時に、慌てていたので、証拠を隠滅し損なったか。あの状況では時間が無かったからとは言え、迂闊（うかつ）だったな。不完全な世界にて完全犯罪を演出するには、証拠を徹底的に消さないといけない。

「ならば、必要の無い錠前と鉄鎖を破棄するのだ。作業を続けるように」

「了解！」

ここでの労（ねぎら）いの一言が、この演出の完成度を左右する。

「頑張っている様子だな。君達には、期待しておるぞ」

「ありがとうございます！」

作業員達は、慌てて持ち場に速足で向かった。（余程俺みたいに怖い上官とは関わりたくないと思ったのか？）

その後ろ姿を眺めて、「若いって、いいよな」と思わず思ったのは、認めざるを得ない。尤も、俺も見る者から見れば、若い部類に入るのだが。まあいいや。

俺は、このあとも、とにかく歩き続けた。

---03---

作業員達は、どうやらこの中途半端に自動化された工場に甘やかされている様子だ。人間同士の会話や意思伝達が必要な場合に、どう対処すべきかを知らない。（その方が俺のような侵入者には有り難い。）

先程の作業員達も、俺の事を知らなかった様子だが、怖くて確認できなかったのであろう。俺が盗んで着用していた制服から、俺の事を勝手に上官であると判断したのか。「別の部署に所属する怖い上司」とでも思ったに違いない。確かにあの時、俺は眼光を鋭く強めたが、それが功を奏したな。

この工場も、浸水階層も、TITの管理に甘えている。TITも杜撰（ずさん）だし、人間もいい加減だ。（俺にはその方が都合が良い。）

さっさとこの工場から脱出しよう。

Part Eight

---01---

何処に工場の出口があるのかは解らないが、とにかく俺は歩き続けた。歩く序（つい）で考えたのだが、この工場の外側には何が存在するのであろうか？俺が生活していた浸水階層の上の階層だよな？扉を開けたら、まさか俺が生まれてから一度も見た事の無い野原や青空が広がっていたりして。期待で胸が膨らんで、破裂しそうだ。

しかし、どの方向を見渡しても、延々と続くのは縦横無尽に張り巡らされた流れ作業のベルトコンヴェイヤーに、何かの作業に特化された大型機械。全てが（中途半端ではあるが）自動化されているから、人間様の居場所が無い。作業員が数名、無理矢理その肉体を無骨な金属の

密林に押し込んでいるが、残された人間性を犠牲にしているみたいだ。そこまでして働く意味が、あるのか？ならば、最初から機械の部品として生まれて来れば良かったのでは？

気分が悪い。早くここから脱出しよう。ここから抜け出れば、人間の本来の姿に戻れるのか。実際に、浸水階層から脱出してから、少しは魚よりも人間に近付いたような気がする。

---02---

工場の出口が近付いているのを、雰囲気を感じられた。

まだまだ無数のベルトコンベイヤーに囲まれた状態だが、その上に乗せられている物体に変化が見られる。先程までは原料ばかりだったのだが、歩けば歩く程に完成品に近付いているのが解る。加工された魚肉に、缶詰に、魚肉ソーセージに、播り身ブロックに、それから、パッケージに入ったマグロの刺身、だと？まさか、先程まで俺が胸に抱いていたマグロが、原料かよ？

通し番号がパッケージや魚肉ソーセージにプリントされている。「TKD_048150969113」だと？俺に与えられた通し番号は、何だっけ？覚えていない。

俺が、この魚肉ソーセージとして加工される可能性もあったのだよな。自分の肉がこのピンク色の染料で着色されるなんて、想像したくも無い。

ここで魚肉ソーセージを眺めている場合では無い。工場の出口に向かうのだ。

Part Nine

---01---

壁が見えてきた。これは、工場の敷地内に配置された衝立やら屏風のようなものではなく、天井まで届く立派な壁だ。これは、工場の端に違いない。機械の密林が永遠に続くのかと思っていたから、この壁を見て安心した。

壁に設置されているのは、単純な構造の金属製のドア。これだけ巨大な工場から外に出るのに使う扉としては、少々物足りないとも言える。これは、裏口だな。近くには、IDカードスキャナーや生体認証装置が設置されている。この手の装置は、施設に入ろうとする者には厳しいが、施設から出ようとする者には甘い。工場を管理するシステムとしては、怪しい者が施設に入り込んで悪さを働く事には警戒する責任があるから、入る者を選ぶ必要がある。だが、工場の外で誰が何をしようと、工場を管理する者からすれば知った事では無い。寧（むし）ろ、怪しい者が工場内に居たら、無条件で追い出して責任を別の施設に任せようとするだろう。

（工場だって、無駄に仕事を増やしたいとは思わない。）つまり、ここで工場が俺の事を怪しいと認めても、出口で俺を止めたりはせずに、厄介払いの積もりでさっさとここから出そうとするだろう。

ここから早く出たい俺には、非常に都合だ。

---02---

俺は余計な事を考えずに、ドアまで歩み寄って書物を彷彿（ほうふつ）させる形状とサイズの取っ手を攫（つか）んだ。取っ手を押す前に、ドアの向こう側にどのような世界が展開されているのかを想像してしまった。もしかして、この Towerld と名付けられている建造物の屋上に

出るのでは無かろうか？ドアの向こうには「三途の川」とやらが流れているのか？ドアの向こう側が実は大海原であれば、俺が育った階層が浸水しているのも説明できる。多分、この向こう側には天国は、無いだろう。この不完全な世界でこれまでの人生を送って来たあとでは、楽園やら桃源郷なんか信じられないな。だいたい、不完全でいい加減な TTT に制御されている建造物の内部で、安っぽい金属製のドアの向こう側に完璧な世界が存在する訳が無い。

あれこれ考えているうちに、ドアを開ける決心が鈍ってしまった。見てはならない物を見てしまうのか？ドアは透明では無いから、向こう側は何も見えない。見えないから、想像を掻き立てられる。うわわあつ。

俺の中で、恐怖と好奇心が拮抗（きっこう）している。

---03---

頭の中で、何かが叫んでいる。

「さっさと取っ手を押して、ドアを開けろよ！」

別の声が、俺に警告を下す。

「落ち着いて、よく考えろ。勢いに任せると、後悔するかも知れないぞ」

俺の魂の音が、俺に静かに囁（ささや）く。

「自分の任務は、何？自分の使命は、何？自分の宿命は、何？」

「考えろ」

ああ、考えているよ。静かにしてくれ。

理性の音が、しっかりと身体の芯に振動している。

「もう旅は始まっている。もう、止められない。もう、止まらない。もう、続けるしか、無い」

俺の精神が、話し掛ける。

「この旅で、これから何に遭遇するかは、解らないし、知らない。だが、それを理解して知る方法は、唯一（ただひと）つ。先ずは、そのドアを開けるのだ。解答（こたえ）が何であれ、それで解る」

俺の心が、決意を固めた。

「ええい、ままよ！」

ドアの取っ手を攫（つか）んでいた手に力を込め直し、ドアの反対側に人がいるかも知れないので、念のためにゆっくりとドアを開けた。

Part Ten

---01---

眼前にて展開される光景に、俺は圧倒、されず。

余りにも、こう、普通で、拍子が抜けた。期待が大きかった分、却（かえ）ってこの凡庸な光景に驚いてしまった位だ。

延々と続くのは、建造物の内部にありそうな廊下。両側には、それぞれの部屋へと続くドアが並んでいた。それだけだ。本当に、それだけだ。

尤も、悪い事ばかりでも無い。少なくとも、床は浸水していない。絨毯が敷き詰められているが、清潔で乾燥している。久々に見る、乾いた絨毯。毛が立っている。毛並みが気持ち良さそうだ。猫に成って、ごろごろ転がりたい。

まあ、それはともかくとして。

これが、精肉工場のある階層か。俺が育った階層と、洪水の有無を除いては、見た感じでは同じだな。

---02---

疑問に感じるのだが、この階層より上にも、階層があるのだろうか？この巨大な建造物に、階層は何層あるのだ？浸水階層も、この階層も、一体何のためにあるのだ？他の階層の目的や存在理由は？そもそも、この Towerld と呼ばれる建造物世界は、何のために、いつ、どのようにして、誰が建造したのだ？誰かが所有しているのか？いつから？どうして？TTT が所有者なのか？TTT は唯単（ただたん）なる管理システムで、誰かが TTT を裏で操っているのか？この階層に到達してから、解答よりも疑問の方が増える一方。

謎を解くには、どうするのか？それは簡単だ。行動を起こすのだ。この Towerld を上に向かって登り続け、次から次へと新たな階層を旅し続ければ、真実が見えて来る。この建造物世界の歴史を解き明かす事も可能だ。

先ずは、この工場から出るのだ。この工場の警備システムは、この怪しい人物を早く追い出したい模様だ。だから、ID カードの提示を強要したりもしない。因（ちな）みに、今の俺は ID カードを持っていない。精肉の材料として、この工場に運搬されたし。生体認証装置であれば、カードを必要としないか。俺の TTT アカウントを、この階層で使用できるかどうかを、俺は知らない。

一度、この工場から追い出されたら、多分俺はこの工場に戻れないであろう。だから、このドアを潜（くぐ）って廊下に出る前に、やり残した事柄があるかどうかを確認する必要がある。

廊下に出たら、腹が減るかも知れない。付近の机の上に並んである魚肉ソーセージを何本が攫（つか）んで、カヴァーオールの下に着ている普段着のポケットに突っ込んだ。そこで思い出したが、この制服の中が結構蒸れている。

もう一度、決意を固め、足を思い切り前に出し、不必要な程に勢い良く俺は工場の外に出た。蒸れて来たカヴァーオールの制服を脱ぎ捨て、廊下を歩き始めた。防水長靴の靴底を通してでも、絨毯の立った毛並みを感じるぞ。

---03---

俺は、歩き続けた。この廊下が何処まで続いて何に俺を導くのか？それは今の俺には解らない。だが、ここで明白なのは、俺がこの巨大な建造物世界 Towerld（TOWER + woRLD）の秘密を解明するのに少しは近付いた事だ。

この時点では、乾いた絨毯の上を歩ける幸福を味わおう。それが、今回の勝利の美酒だ。

---04---

俺の頂上への旅は、始まったばかりだ。

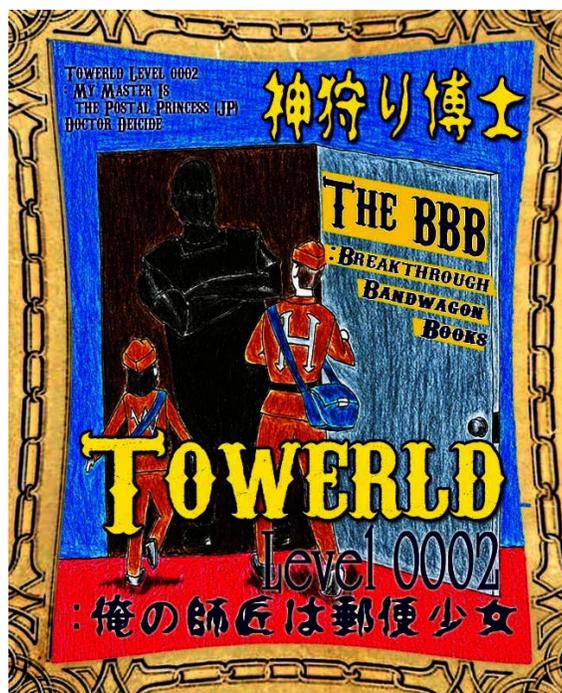
(Level 0002 へ続く)

THE BBB : BREAKTHROUGH BANDWAGON BOOKS



この作品は The BBB: Breakthrough Bandwagon Books のために書き下ろされたオリジナル作品です。

The BBB での神狩り博士著作リスト



Towerld Level 0002: 俺の師匠は郵便少女

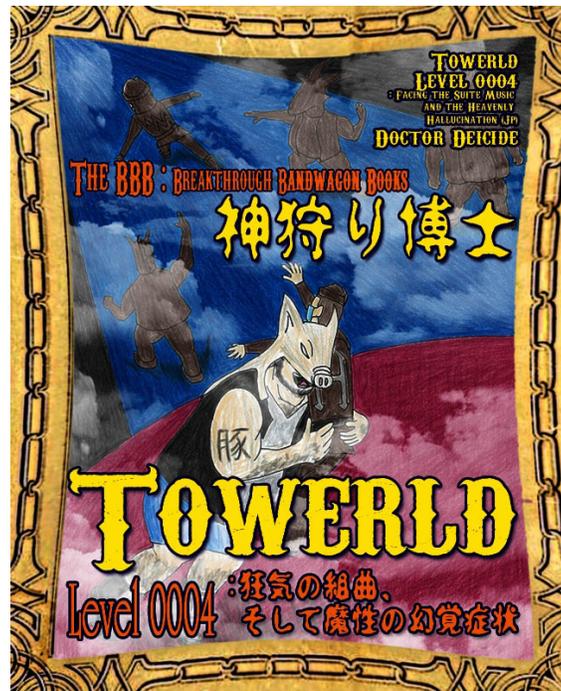
<http://thebbb.net/jp/ebooks/towerld-level-0002.html>



Towerld Level 0003: 麻薬王と弦姫と獣頭兵団

<http://thebbb.net/jp/ebooks/towerld-level-0003.html>

The BBB での神狩り博士著作リスト



Towerld Level 0004: 狂気の組曲、そして魔性の幻覚症状

<http://thebbb.net/jp/ebooks/towerld-level-0004.html>



Towerld Level 0005: いざ上層階へ、遠征隊結成

<http://thebbb.net/jp/ebooks/towerld-level-0005.html>

The BBB での神狩り博士著作リスト



Towerld Level 0006: さらばウエンディ、俺は歌姫の虜

<http://thebbb.net/jp/ebooks/towerld-level-0006.html>
